

平成27年度第1回（経済・経営・数学）分野連携グループ合同委員会議事概要  
学系別FD/ICT活用研究委員会（経済学、経営学）  
サイバー・キャンパス・コンソーシアム運営委員会（数学グループ）

I. 日 時：平成27年10月18日（日）15：00～17：00

II. 場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）7階 白根

III. 出席者：経済学

林委員長、碓井委員、渡邊委員、児島委員、山田委員、中嶋委員

経営学

佐々木委員長、安田委員、岩井委員、日置委員、青木委員、宮林アドバイザー

数学

井川委員、白田委員、山本委員、平野委員

事務局 井端事務局長、森下、中村

### III. 議事概要

#### 1. 出席委員の紹介

委員会開催にあたり、経済・経営・数学分野の各委員の自己紹介が行われた。

#### 2. 報告・検討の概要

(1) 平成27年度の事業計画の説明の後に平成26年度の事業報告書から昨年度の分野別のアクティブ・ラーニング対話集会の活動内容が報告された。

(2) 平成27年度の活動計画

資料①により、分野連携による対話集会の目的及び開催方針の説明が説明され、対話集会の進め方について意見交換された。

#### 3. 意見交換の概要

(1) 対話集会の目的、計画、進め方などについて

学生の主体性を引き出し、伸ばす授業が求められることから自ら問題を発見し、答えを見出し実践できる力を育むアクティブ・ラーニングについて、昨年度は分野ごとにアクティブ・ラーニングのイメージについて共有した。今年度は「対話を通じて課題を発見し、課題解決に向けた学びを主体的・協働的・創造的に展開していくアクティブ・ラーニングの手法とそれを実現していくための授業運営の工夫」、「組織的に推進していくため教学マネジメントの工夫」について対話集会を通じて考察を行う。

- ・ 対話集会は、分野連携の10のグループ編成で行うこととしている。
- ・ 経済・経営・数学グループを1つのグループとして分野連携で対話集会を開催する。
- ・ 分野共通のテーマでアクティブ・ラーニングを考えるのではなく、各分野の先生の知見、分野ごとの視点でテーマを検討するのがねらいである。

(2) 話題提供や意見交換のテーマなどについて委員の意見

- ・ 経済、経営は文系の学問と考えられ、数学の力が弱いことが課題となっている
- ・ プレゼンは強いが、データベース的な裏付け、数学的な分析、戦略論、組織論などの理論に弱い、入試改革、初年次教育との連携、どのように質保証していくのが課題
- ・ 社会人基礎力として観察力、ある程度分析力を持ってデータベースの裏付けも取れるような、経営学、または経済学を学人材が求められている。
- ・ 以前は経営数学など数学や統計を重視していたが、数学離れで経営学、経済学での数学離れが多くなっているのではないか
- ・ データを分析でき、裏付けをもって活用できることが社会で求められるがこのための教育は不足している、
- ・ 中・高生むけに「考えるカラス」というNHKの番組があるが、いろいろ実験を通じて結果をどのように理論づけるかという理論的番組である。このような番組も共通認識として取り入れたらどうか。
- ・ 自ら考える力は重要だがアクティブ・ラーニングを通じて「何を持って考えるようになったか」の評価やチェックが難しい
- ・ 10を無理やり教えて1しか定着していなかったのが、アクティブ・ラーニングで教える内容が5でも、3定着すればいいじゃないかということもあるが、シラバスをみるとあれ、本来教えるべき事を教えていないではないかというジレンマがある
- ・ 知識の量を獲得させ、対話の学修で成果をあげるには反転授業が有効である。反転授業で出来るだけ学生に予習をさせ、予習をさせる習慣さえ付けば、同じ知識の量でも定着する率が高くなる。
  - ・ 山梨大学の森澤先生の発表では、15回の内5回れば良い、ただし2年間くらいうまくやらないと効果はでてこない、先生も失敗して初めて前に進んでいる
  - ・ ビデオ教材を事前に見て、やって、それで見てこない奴は、教室に対面できた時に、ついて行かれないということを経験させて、そして予習をさせるということが重要
- ・ 学修意欲が低く、脱落する学生を防ぐには学生がサポートすることが効果的であり、学生という教育資源の活用も重要
- ・ アクティブ・ラーニングのゴールは説明させること。「説明できない」という辱めも大事。チームの中で説明させる習慣を通してチームの中で自分の立ち位置がわかる。自分で自分を振り返るチャンスを与える仕掛けが大事
- ・ 東京女子医科大学ではTBLという方法をとっており、7から8人のチームを作って、チームで助け合い、チームで責任を持って出来ない学生をサポートする。引学生目線で学生同士がお互いに困っている中で助け合う。学生という教育資源をどういうふうに活用するかというのもポイントである
  - ・ 金沢工大では別棟を建て、チームによるグループ学修をさせることで非常にレベルの低い学生をかなり引き上げている
  - ・ こういうモデルがあることを外部に示す。成功しているケースばかりでなく、失敗の事例が重要である

- 学習院大学では、少人数教育で、教員、院生のTAが集まって、さあ、みんな、何でもいいから、何聞いてもいいから、どんな馬鹿な事を聞いていいから、笑わないからといって、先生が家庭教師やりますというような時間をとった学修を行っているがこれは効果がある
- 教養的な知識をきちんと勉強して、そういう人たちが専門の勉強をしたらもっとどんどん伸びる。教養教育と専門教育の棲み分け、あるいはタイアップをどうやって連携していくかは非常に重要だと思う。教養力、足腰が脆弱になっている中でいきなり専門的な学問内容を、反転教育とかいろいろな手法を使ってやっても、なかなか成果が上がらない。
- 今の数学の授業は数学者を作るためには一番手っ取り早い授業方法だと思うが、教えている学生は数学者になるわけではない
- 学士課程の中で、如何に数学を活用できるような教養を養うか、専門をいくらやっても教養が大事あり、教養と学士力を実現するための教養が大事だ。そのための質保証のアクティブ・ラーニングというテーマが考えられる。また、TAの活用や企業との連携というのを考えると、知識・技能・態度の活用がためのアクティブ・ラーニングのテーマが見えてくる。
- 教学マネジメントというところにすごく興味があり、今は教員中心で、教員が基本のカリキュラムで、授業科目の統合が全く進まない、教学マネジメントの教員中心の授業科目編成とか、学位プログラム中心の科目編成はすごく重要なことである
- アクティブ・ラーニングも全部やったら学生がパンクしてしまうから、大学ガバナンス主導で、組織的に学位プログラムを考え、科目編成の中にアクティブ・ラーニングをとり入れて行かないと教員個人では限界である
- ガバナンスにちゃんと意見が言えるような、バックグラウンドを作る必要がある。ガバナンスに対して、先生方、現場から意見を言えるような体制を作っていくテーマも重要である。教育方法ばかり議論しても改善しない。そういう意味で合同チームで研究する、発想を変える必要がある。
- 新しい発想で、先生方のガバナンスのそういう発想をもって、授業の工夫を考えてもらい、学内でしっかり、下からちゃんと意見を言ってもらうようにしないといけない
- テーマとしては、今までのようなアクティブ・ラーニング具体的な議論より、教学マネジメントみたいなものもちょっと1本出して、それで少し作り上げたほうが、執行部に情報発信ができる。3分野のいろいろな視点からのマネジメントもあるので、それを中心にされたらいいのではないか
- 現状では教養教育と専門の連携が無いことが問題になっている。対話が無く、教養と専門が体系化されていない。この改善が今回のテーマとして非常に重要で、多くの参加者と議論出来るところでないか
  - 教員中心の授業科目編成が学位プログラムとなっているが問題はシラバスの中身であり、その中身を変えていただかないといけない。シラバスをピア・レビューし、学位

プログラム中心変えるためには科目の内容とか、教養の先生方との協力体制、協調というのは、避けて通れない問題だと思う

- ・ 質保証のためにどうやって、授業を改善したらいいかという、もうそろそろ分野で少し連携して、本当に胸襟を開いて、お互いに先生方が協力し合わないと、困るのは学生なのではないかというところが大事
- ・ アクティブ・ラーニングは一つの手段であり、別にアクティブ・ラーニングでなくても、質保証のためにどうして授業改善をやったらいいのかが重要
- ・ いろいろな分野の違う先生方が集まって考えると教養教育をどうしようか、専門教育との連携をどうしようか、そういうところまで出てくるのが、非常に面白いと思う
- ・ このような提案をして、いろいろご意見を聞いて対話集会をやるということも考えられる
- ・ このようなテーマも重要であるし、そういうことを問題点として発表してみるということも考えられる
- ・ サクセスモデルを発表しても意味はない、むしろいろいろやったけれども、うまくいかない、そういうことを先生方が報告してもらう方が意見交換しやすいと思う
- ・ 今までの事例発表はサクセスモデル、今度は逆に失敗の中から、もう行き詰っているから、何かここで皆で考えましょうといったほうが手取り早い

以上の意見から話題提供や意見交換のテーマとしては以下のようなことが考えられるのではないか

- ・ 組織的に学位プログラムを考え、科目編成の中にアクティブ・ラーニングをとりいれて行く質保証のための教学マネジメントやアクティブ・ラーニング
- ・ 教養教育と専門教育を体系化した学位プログラムやアクティブ・ラーニング
- ・ 教員中心の授業科目編成を学位プログラム中心に変え、シラバスをピア・レビューし、科目の内容、教養教育との協力・協調の仕組み
- ・ 上級学生、院生等が学生をサポートする仕組み
- ・ 社会科学系、経済、経営、数学がもっと連携する授業も1つのテーマではないか
- ・ 教員個人でなく、大学として質保証のためにどうやって授業を改善したら良いか
- ・ 問題点を発表し、失敗モデルの意見交換等も考えられる、サクセスモデルは不要である

## V. 今後の予定

次回は11月8日(日)13:30から合同委員会を行い、対話集会の開催要項を検討することにした。また、できれば、対話集会のテーマ、取り組みの事例、意見発表してもらえような話題について事例を自薦他薦問わず持ち寄っていただき開催要項をとりまとめることにした。